《研究ノート》

《ロシアのことわざ》（その１）
—歴史的・社会的・文化的背景から眺めた—

齋　藤　　裕

《Russian Proverbs and Sayings》
—A Study From Historical, Social and Linguistical Standpoints—

HIROSHI SAITO

キーワード
ロシア（Russia），ことわざ（proverbs, sayings），ロシアの歴史・社会・文化

はじめに

ロシアの民族学者ウラヂミール・ダーリ（1801－72）は最初の本格的なロシア語辞典（「ダーリの辞典」）の執筆者として有名ですが，かれの編集になる『ロシア民衆のことわざ』（1862）には自らの手で収集したロシア語の俚諺（りげん），慣用句の類が延々と三万余りにわたって記載されています。巻頭を飾っているのは「神・信仰」の部類に収められた〈生きるとは神に仕えること〉Жить——служи́ть бо́гу. ということわざです。

ここでは専門的な立場を離れて，いわゆる俚諺 посло́вица〈パスローヴィツァ〉，慣用句 погово́рка〈パガヴォールカ〉，格言・名句・金言 крыла́тые слова́〈クリラッティェ・スラヴァー〉などを総称して，大雑把に「ことわざ」と呼ぶことにしましょう。

ちなみに著者としてはパスローヴィツァに狭義の「ことわざ」を，パガヴォールカに「言い習わし」という訳語をあてたいと思います。

この小論にはそれら厖大な数の「ことわざ」の中からロシア内外の数種の資料を比較考量して，とりあえず，見出しとして（A）ロシアの民衆にとくに親しまれ，よく引用されるもの，（B）ことにロシアの風俗や習慣に根ざしたもの，（C）世界と共通するような，また外国に起源を持つものなどを30種だけ選りすぐりました。その他に説明文の中で引用したものを含めると優に100を超えることになるでしょう。

今日のロシアで通用している「ことわざ」の数は，ざっと見積もって1000～2500だと言われています。もとよりここに挙げられている文句は全体からすれば微々たるものですが，それでもできるだけ「ロシアのことわざ」の精華を洩らさないように努めました。

これらの「ことわざ」にはロシア語の原文を載せるとともに，忠実かつ平明な和訳と，ほぼ対応する「日本のことわざ」とを併記しました。この部分には新しい説もいくつかうち出してあります。

これまで日本では，日本をはじめ「世界のことわざ」を扱った本が次から次へと，実用的なものからエッセイ風なもの，さらに専門書にいたるまで，おびただしく出版されています。それでも，いざ「ロシアのことわざ」となると，それを正面から扱った書物は，妙なことに，数えるほどしかありません。多くの場合世界のことわざの一部として紹介されているに過ぎません。まれにロシア語が引用されていても，もっぱらことわざの大意や民俗的な内容が中心に

なっており，ロシア語の文章の文法や用法に関する説明が手薄であることは否めません。

そこで今回の試みでは「ロシア語のことわざ」という点を何よりも重視する方針を立てました。取り上げたことわざには，上述のように，まずロシア語原文を載せ，それに和訳と日本のことわざを併記してあります。さらに，それらの例文一つ一つに，その成り立ち，言語表現から思想内容，歴史的・民俗的背景にいたるまでかなりくわしい注釈や説明をつけるように心がけました。

この論考をまとめるに際してもちろん優れた各種の露和辞典の恩恵にあずかりました。しかしながら辞書にはスペース上の制約もあり，ロシア語本文の異同（ヴァリアント）の検討や英語・独語・仏語その他の言語のことわざとの比較までは望めません。控えめながら，そんな点に留意したのもこの小論の特色の一つといえるかもしれません。

おのおのの国のことわざを扱った文章は，えてしてお国自慢や手前味噌になりがちですが，ロシアの文化や社会をふり返れば，ロシア国民文学の祖とされる文豪プーシキンの作品や伝記を繙くまでもなく，歴史的に西欧の諸国と深い関係にあったことは無視するわけにはいきません。そうした意味でことわざの成立や発展には，一部の聖職者や貴族の活動もかなり与っていたと考えていいでしょう。

一般に「ことわざ」はその民族の知恵と経験を凝縮したものにほかなりませんが，他方で「ことば」の表現としてみると，とくに民衆の口承文芸の宝庫であり，延いては一国の文学表現の母体であるといってもあながち過言ではないでしょう。

その内容の点では，19世紀の後半でも民衆すなわち農民であったというお国振りを反映して，「ロシアのことわざ」は誰よりも農民のものの見方，感じ方から生まれ，また逆にそれらを如実に表わしている点に大きな特徴があります。

広漠たる空間，厳寒の自然，苛烈な政治支配のもとで一日一日をたくましく，しぶとく，しかも楽天的に生き抜いてきた百姓（мужи́к）たちの喜怒哀楽の感情が，ことに「呻きや叫び」（ダーリ）が，それらのことわざには息づいていると言われるゆえんです。そこには農民らしい素朴さや土臭さが充満しています

どの民族の「ことわざ」であれ，その形式，修辞の面の特徴として，頭韻，脚韻などの韻，比喩的な文章，対句的・対照的表現，また簡潔的な文体といった特色がよく指摘されますが，ロシア語のことわざにしてもその例にはずれるものではありません。

しばしば韻を踏み，みごとな旋律を響かせ，きびきびした短文に結実したロシアのことわざは，悠久の昔から民衆の生活の中に口承文芸として生まれ，育まれてきました。それらの「ことわざ」は繰り返して，口ずから語られ，耳で聞いて，人から人へと，土地から土地へ，時代から時代へと受け継がれてきたものです。

こうして民衆を中心に磨き上げられてきた「ことわざ」の数々は，ロシアの民衆の息吹に触れ，文化の土壌としての民間伝承（フォークロア）を解明する上で貴重な遺産ですが，わたしたちがロシア語に習熟し，ロシア文学を味読しようとする場合にも，かけがえのない宝物であると言えそうです。

語学の観点からすると「ことわざ」は古い単語や俗語的表現をときに含んでいて，とっつきにくい点もあるので，見出しとしてかかげた「ロシア語のことわざ」にはすべて，また本文でも適宜カタカナ表記を付すとともに，ロシア語の語彙や用法には，かゆい所に手が届くような懇切丁寧な解説を試みました。

ともあれ，短くて語呂のよいことわざは覚えやすさが身上ですから，語学の学習として暗誦するにはそれこそうってつけといえるでしょう。「ことわざ」は覚えるだけでも楽しいものです。

本文の解説については，語学的な気配りはむろんのこと，それ以外にも民俗的背景や関連事項にも一歩踏み込んだ説明を加え，時にはかな

り高度なものも交えてみました。

ですから歴史などに関心を抱いている方々にもきっと参考になるだろうと思います。

2008年11月

齋藤　裕

「参考文献」

この小論は次に挙げる参考文献に極めて多くのものを負っている。本来なら本文の中で文献の該当箇所をいちいち明示すべきところだが，これはもとより専門的な論文ではなく，一般向けの読みやすい文章を意図したものなので，失礼ながらここに一括して，これらの編著者に対する著者の深い感謝の念を表わしておくことにする。よろしく了解していただきたい。

『ドイツ語ことわざ辞典』山川丈平編，白水社，1975.

『フランス故事ことわざ辞典』田辺貞之助編，白水社，1976.

『博友社ロシア語辞典』木村彰一他編，1975.

『研究社露英和辞典』東郷正延他編，1988.

『コンサイス露和辞典』井桁貞義編，2003.

『パスポート初級露和辞典』米重文樹編，白水社，1997.

『岩波ロシア語辞典』和久利誓一編，1992.

『ウシャコフ詳解露露辞典』五月書房版，1953.

『オジェゴフ露露辞典』（３版）1963.

『ロパーチン詳解露露辞典』（３版）1994.

『ポクポフ家の陽気な人々』米原万里著（NHKテレビ ロシア語会話テクスト：1997－8）

『ロシアの言語と文化』戸辺又方著，ナウカ，1996.

『ロシアのフォークロア』フョードル・セリバーノフ編著，金本源之助訳，ナウカ，1998.

『モスクワ』木村浩著，講談社，1992.

『亡命ロシアの料理』ピョートル・ワイリンドル・ゲニス著，沼野充義訳，未知谷，1996.

『本のための生涯』イワン・スーチン著，松下裕訳，図書出版社，1991.

『世界の故事・名言・ことわざ』（「ロシアのことわざ」江川卓）自由国民社.2003.

『ロシア文法』八杉貞利／木村彰一著，岩波書店，1968.

『スラヴのことわざ』栗原成郎著，ナウカ，1989.

『ドイツ・西欧・ことわざ・名句小辞典』下宮忠雄編著，同学社，1994.

『ことわざで英語を学ぶ』奥津文夫著，三修社，2008.

『酔いどれロシア』A.ジノビエフ作，川崎浹訳，岩波書店，1991.

『ロシア語のすすめ』東郷正延著，講談社現代新書，1986.

『ロシア文法の要点』原求作著，水声社，1996.

『ロシア』原卓也監修，新潮社，1994.

『ロシア・ソビエトハンドブック』東郷正延他編，三省堂，1978.

『まるごと覚えようNHKスタンダード40ロシア語』亀山郁夫著，NHK，2000.

『NHK気軽に学ぶロシア語』沼野充義，NHK，1993.

1　Ти́ще е́дешь да́льше бу́дешь.［A］

チーシェ イェーヂェシ ダーリシェ ブーヂェシ

ゆっくり馬を遣れば，より遠くまで行ける。《急いては事を仕損じる》

《小馬の朝勇み［朝駆け］》（初めに力を入れすぎて最後まで続かないこと）

あちらのどんな教科書にも載っているというほどロシアの代表的なことわざ。原文は丁寧に訳せば「よりゆっくり馬を進めれば（動詞éхатьは（乗物に）乗って行く！　この場合「馬」で行くと考えてよい）それだけより遠くまでбу́дешь行く」の意味である。Е́дешьとбу́дешьは韻を踏んでいる。かつてあるテキストでは，後ろの部分までéдешьになっていたことがある（もちろん誤り）。現行の露和辞典で

はどれも《急がば廻れ》のみをあてているが，日本のことわざとしてはまず「小馬の朝駆け」を挙げる方が妥当ではないだろうか。「馬を急がせて責めすぎると途中で馬がへばってしまう」（江川卓）のである。

《疲れていない馬はキエフ Ки́ев まで行ってきた》という古いことわざも参照すべきであろう。むろん，転義として「ゆっくりと慎重に事を運ぶほうがいい」という意味にも用いられる。これに対して От того́ ме́ста куда́ е́дешь.（目指している所からね）などと混ぜっかえすこともある。

なにはともあれ，文法のおさらいから始めよう。е́дешь は е́хать「定動詞」（「不定動詞」は е́здить）の，また бу́дешь は быть の二人称単数現在形。この単数二人称はいわゆる《一般（普遍）人称文》である。ふつうは主語（ты）がなくて，その行為が（相手だけでなく）誰についても当てはまることを示す。この形式は命令文，《不定人称文》とともに，ことわざではしばしば用いられるから，ここでしっかり理解しておきたい。

Ничего́ не поде́лаешь.（どうしようもないさ）。この Ничего́. は周知のごとくロシア人の生活で頻発される文句であるが，かれらの一見あきらめにも似た，楽天的なしぶとい生き方をよく表している。前後の状況でいろんな訳が可能となる。

たとえば「なんでもないさ」「まあまあ」「ぼちぼち」「何とかなるさ」「平気よ」「悪くない」「なかなか」「だいじょうぶ」「まずまず」「けっこうだ」「問題ない」などなど。

フランス語でも Qui veut voyager loin menage sa monture.（遠くへ行こうとする者は馬をいたわる）［ラシーヌ『訴訟狂』］という古いことわざがある。

да́льше は далеко́ の比較級，ти́ше は ти́хо の比較級（いずれも副詞）。ここで後者を「静かに行けば行くほど遠くに行ける」［博友社ロシア語辞典（改訂版）］と解するのはうなずけない。ти́хий ход は「徐行」。ти́хий Дон はロシア革命と内乱を描いたショーロホフの有名な大河小説『静かなるドン』。もちろん Тише! Ребёнок то́лько что засну́л. の場合であれば「しっ，静かに！　赤ちゃんは寝たばかりよ」となる

Есль бу́дете е́хать так тѝхо, мы наве́рно опозда́ем.「そんなにゆっくり（車を）運転したら，われわれはきっと遅れてしまうぞ」これは現代の自動車社会の話である。そうなると事情がまったく異なってくる。ともあれ運動動詞 е́хать と идти́（歩いて行く・来る）の用法は少しやっかいである。馬や乗り物そのものが動くときは идти́（不定動詞は ходи́ть）を使う。

Ло́щадь идёт гало́пом.

馬がギャロップ（全速力）で走って行く（来る）

Этот по́езд идёт в Пи́тер.

この列車はペテルブルグに向かって（進んでいる）。

Питер は（Санкт）Петербу́рг（サンクト）ペテルブルグの愛称・省略形（かつてソ連時代1924－1991にはレーニンにちなんでレニングラードと呼ばれていた）。

ただし自動車については е́хать も用いるので注意！　Е́дет маши́на!（車が来るぞ！）

この点でドイツ語の動詞 fahren（乗物で行く，乗物が走る）の用法との類似，相違に留意すべきある。古代の印欧語族では，少なくともその一部にあっては，乗物で行く場合と歩いて行く場合を使い分けていたことがうかがえる。

◎Ich fahre nicht, Ich gehe.

わたしは乗物に乗らないで，歩いていく。

◎Der Bus fährt zweimal am Tage.

バスは一日に二度通る。

ちなみに《急がば廻れ》に類することわざは，もとをたどるとラテン語の有名な格言 Festina lente.（ユックリ急ゲ）［「アウグストゥス・カエサル伝」スウェトニウス］にまで行き着く。ちなみに開高健はこれを「悠々と急げ」と訳している。英独のことわざ Make haste slowly.／Eile mit Weile. はいずれもこの借用である。ドイツ語のものは語呂がいいのが取柄だが，原典の簡潔にして含蓄のある表現にはとう

ていかなわない。一見すると矛盾したこうした言い方は撞着語法（oxymoron）といい，古くからあるようだ。これを合理化して，「賢明に，あわてずに，注意深く」急げというように解するのは野暮としかいいようがない。むしろ意表を突くところにこのことわざの真骨頂があるといえよう。

2　На вкус на цвéт товáрища нет.［A］

ナ　フクース　ナ　ツヴィエート　タヴァーリシシャ　ニェート

《味と色について仲間はいない》《蓼食う虫も好き好き》《十人十色》

вкусは「味」から「趣味」にもなる。вкýсноは「おいしい」。またцветは「色」（複数はцветá），цветóкは「花」（複数はцветы́）のことだ。紛らわしいので，くれぐれもご用心。товáрища нетはいわゆる《否定生格》で，「仲間，友人はいない」という意味になる。нетはбыть「存在する」の否定。過去，未来はそれぞれнé было, не бýдетとなることを思い出そう。ロシア語では，存在しないものは文の主語になる資格（主格）がない。したがってこの文は《無人称文》である。たとえばБóга нет.（神はいない）

◎У меня́ нет врéмени.
（わたしには時間がない）現在形

◎Жаль, что вас нé было с нáми.
《きみらが一緒に居合わせなくて残念だ》
過去形

◎Зáвтра дождя́ не бýдет.
（明日は雨が降らないだろう）未来形

類似のことわざにО вкýсав не спóрят.（好き嫌いは議論のそと）やСкóлько годóв стóлько умóв.（頭の数だけ知恵がある。十人十色。世の中はさまざま）がある。

フランスにも類似のことわざがある。

◎De gouts et des couleurs, il ne faut pat discuter.

◎товáрищ は「仲間」「友人」。ある会話の本には「同志」と訳してあるが，この場合はふさわしくない。ロシア革命（1917）によってそれまであった煩瑣な敬称の体系がご破算となり，ソヴィエト時代にはこのことばが唯一の敬称として使用された。本来の「同志」の意味から転じて，姓や職名につけてтовáрищ Иванóв（イワノーフさん）また見知らぬ人への呼び掛け「もしもし！」として，国民の間でごく普通に用いられたが，現在ではгосподи́н「旦那。主人」に取って代わられた。世相の有為転変と一抹の寂しさを感じさせる。筆者としてはソヴィエト時代のものをすべて糞味噌に否定するような風潮に組することはできない。

ちなみに「十人十色」に当たることわざとしてはВ однó перó и пти́ца не роди́тся.（鳥でさえ同じ羽では生まれてこない）がある。ときどき見かけるが，пти́цаをうっかり「小鳥」と訳したりしないように。

◎Кáждая пти́ца свои́м нóсом кóрмится.
鳥はみな自分の嘴で餌をついばむ。

3　Что（ни）гóрод, то нóров［, что（ни）дерéвня, то обы́чай.］［C］

シトー　ニ　ゴーラット　ト　ノーラフ,　シトー　ニ　デリェーヴニャ,　ト　アブィーチャイ.

町には町の風習，村には村の習慣。／土地が変わると風俗や言語も違うもの。
《所変われば品変わる》《難波の葦は伊勢の浜荻》

нóровは習慣，習わしを意味する古語。もと教会スラヴ語のнрав「性格，気質。（複数）風習」と同源。нрáвитьсяはおなじみの単語。「～が（主格）～には（与格）気に入ってる」

Мне нрáвится Петербýрг.
私はペテルブルグが気に入っています。

нрáвитьсяよりлюби́тьのほうが強い意味で使われる。

「町には町の数だけの習わしがある」というこの表現はかなり古いものらしい。чтоは助詞のниとともに《どの～も，～ごとに》という形をとるのがふつう。文章形式の点でも素朴な

点を残しているといえそうだ。

もっとも，ドイツやフランスにも類似したことわざがあるから，これがロシアの国産だとにわかに断定するわけにもいかない。なお例によって後半は省略されることも多い。

Andere Länder, andere Sitten.
別の国には別の風習，
Autres pays, autres mours
国や町の違いを，時代の違いに見変えたことわざもある。

◎Други́е времена́——други́е нра́вы.
時代が変われば習俗も変わる。

4　Не всё коту́ ма́сленица (быва́ет [придёт, бу́дет] и вели́кцй пост). [B]

ニ フショー カトゥー マースリニッツァ，(ヴィヴァーェト [プリヂョート/ブーヂェト]　イ　ヴェリーキイ　ポースト)

猫にとっていつもバター祭り ма́сленица とはかぎらない。[пост 大精進（大斎）のこともある]《楽あれば，苦あり》《楽は苦の種》

ма́сленица はロシア正教では復活祭に備えて二月の大精進に入る前の一週間をさす。もとは古代の異教時代に，長い冬を送り出し暖かな春を迎えるスラヴの祭りであったらしい。カトリックの謝肉祭（カーニヴァル）にあたる。まさに村を挙げてのお祭りであって，ウォートカ во́дка を呑んだり，ブリン блин を食べたり，ご馳走のかぎりを尽くして，陽気に浮かれ騒いで，お祝いする習わしである。こうして，その後の四旬（40日）にわたる大祭の物忌み，断食に備えるのだ。政教分離から宗教否定にまで突き進んだソヴィエトの時代を挟んで，今日でもロシアではこうした民衆の祭礼は盛大に行われている。

日本では《猫に鰹節》というが，ロシアを含めてスラヴ諸国や西欧の国々では《魚・肉・バター》などが猫にとって好物となっているとみえる。このことわざで猫が出てくるのも ма́сленица → ма́сло バター → кот 猫という連想によるものだろう。

◎Стар кот, а ма́сло лю́бит.（年をとっても，猫はバター好き）といわれるほどに猫はバターが好物である。日本ハリストス正教会では乾酪（かんらく）週間という。乾酪とはチーズ сыр のこと。ロシアではこの週をバター週間 ма́сленая неде́ль とも，チーズ週間 сы́рная неде́ль ともいうが，それはこのお祭りの料理にこれらの乳製品をふんだんに用いてきたことに由来する。いきなり謝肉祭（カーニバル）という訳語をあてる辞書もあるが，それは好ましくないだろう

世の中は良いことばかりではない。всё はここでは всё вре́мя「いつでも」のこと「すべて」の意味ではない。не всё で《部分否定》になる。《必ずしも～でない》。

◎Мы всё зна́ем.
わたしたちは誰もが知っている。

◎Я всё знаю.
わたしは何でも知っている。

коту́ は кот の与格。雌猫は ко́шка。なお後半部は省略されることが多い。こうした省略は他のことわざでもよく見受けられる。お互いに知っているのが前提であるから，言わずもがななのだ。余韻を持たせる意味合いもある。日本でも「噂をすれば……」などという。

◎Пья́ному и мо́ре по коле́но [. а лу́жа по у́ши.]（酔っ払いには海も膝まで，[水溜りは耳まで]）。酒を飲むとやたら気が大きくなって，なにも怖いものなし。海もせいぜい膝までの深さしかないと，向こう見ずに進んでいく。

5　Пе́рвый бли́н (всегда́) ко́мом. [B]

ピェールヴィ　ブリン　(フスィグダー)　コーマム.

最初の блин ブリンは団子になるもの。失敗は成功のもと。ものごとの初めに失敗はつきもの。他人の失敗を慰めたり，同情したりするときに使う

ブリンのあとに всегда́（いつも，常に）が入

ることもあるが，それだと冗漫に流れる。無い形が本来のものだろう（ウシャコフの辞典など参照）。ブリン（ふつう複数のбдины́）はうすく溶かした小麦粉やそば粉にイーストを加えて，円形にうすく焼いた「クレープやホットケーキ風の」もの。丸い形が太陽すなわち春を表わすといわれ，昔からマースレニッツァ（バター祭り）につきもののめでたい食べ物とされてきた。バターを塗ったり，イクラикра́（魚卵，特に鮭の卵）を乗せたり，その他ジャム，チーズ，鰊（にしん），塩鮭，スメタナなどをくるんで食べる。ちなみに高価な珍味として。フォア・グラfoie gras（ガチョウの肝のパテ）と並んで有名なキャビアcavier（チョウザメの卵の塩漬）はフランス語であるが，もともとロシアの特産であって，ロシア語ではчёрная икра́という。これは庶民とは無縁の食べ物で，京都の庶民の松茸みたいなものである。

とにかく「ロシア料理の醍醐味のひとつは，こうしてブリヌィをたらふく食べることにある」（木村浩）という人もあるほどだ。

初めのうちは練り粉を寝かせる加減がなかなかむずかしく，上手にうすく焼けないで，団子のように固まってしまうらしい。

ко́мом はком（かたまり）の造格で，状況，様子「～のように」を表わす。Выть во́лком「狼のように吠える／泣き言をいう」。

◎Без блина́ не ма́сленица.

（ブリンがなければバター祭りにはならない）「酒なくて何のおのれが桜かな」（『岩波ロシヤ語辞典』増訂版）

◎Блин не клин.（брю́ха не расколе́т）

（ブリンは楔にあらず。／くさびのように腹を断ち割ることはない）。つまり，ブリンはいくら食べても大丈夫ということ。

ブリンがロシアのことわざに占める位置は相当なもので，ダーリの辞典では半ページ以上も続いている。昔ながらの食べ物としていかに民衆に親しまれてきたかがよくわかる。

言ってみれば，日本の正月におけるお餅のようなものと思えばわかりやすい。

◎как блины́ печь

［口語の慣用句］（手早くやる。何かをたくさん用意する）。見出しのことわざと共にきわめてよく使われる言い回し。英語圏でも《like hotcakes》（面白いように，飛ぶように）といった表現があるのは，それこそ面白い。

◎Sweaters are selling like hotcakes（like fun）

セーターが飛ぶように（面白いように）売れている。

6　Аппети́т прихо́дит во вре́мя еды́.［C］

アペチート　プリホーヂト　ヴァ　ヴレーミャ　イドィー

食欲は食べるにつれて湧いてくる。《欲望に切りなし。望蜀の嘆》

一般に「食欲は食事のときにやってくる」と直訳される（米原万里）ことが多いが，それでは意味が少しあいまいになる。とうやら，このことわざはフランスのことわざL'appetit vient en mangeant.（食欲は食べるほど増すもの）［ラブレー『ガルガンチュワ物語』］を取り入れたものと考えてよさそうである。

フランスでは「望蜀の嘆」つまり欲望には限りがないという含みで用いられるが，ロシアでは「何でもやり出すと興味が湧いてくる」ぐらいの意味に使うようだ。裏から言えば《食わず嫌い》に通ずる。また何か新しいことを始めて，それに凝りだしたりしたような相手に向かってもいう。

ドイツ語や英語にもまったく同じことわざがある。

◎Der Appetit kommt beim Essen.

◎Appetit comes with eating.

◎Прия́тного аппети́та！

（おいしく召し上がれ！）これはことわざではないが，食事をすすめたり，食事中の人に対する挨拶としてよく使われる表現。この場合生格をとるのは，前に(Я) жела́ю вам が省略されているためである。なおЗа ва́ше здоро́вье！も同様な言い方だが，これは「（ご健康を祝して）乾杯！」の意味にもなる。

また еда́は「食事」。ご存知のように動詞の原形は есть（食べる）で，быть（ある）の現在形 есть と同形であるが，変化はまったく異なるので，要注意。ここでまとめておこう。念のため！

есть 現在形の変化 ем/ешь/ест/еди́м/еди́те/едя́т（食べる）

быть　　есть（無変化）（ある）

Е́шьте на доровье！（たんと召し上がれ）という言い方もある。

7　Лу́чше по́здно, чем никогда́［C］

ルーチシェ　ポーズナ　チェム　ニカグダー

遅くともなさぬ（来ない）よりまし。時刻や期日に遅れても，何もしないよりはよい。約束の時間に遅れてきたときや，仕事の期限に間に合わなかったときなどの言い訳にも用いられる。また反対に，待っていた相手が「来ないよりはましですからね」という場合もある。

《Лу́чше（хорошо́の比較級）～, чем（よりも）～》というのは一つの定型となっているから押さえておきたい。それに細かいことだが，文頭の場合を除いて，чемは必ずその前にзапята́я コンマ（，）をつけることに注意しよう。

◎Лу́чше ма́ленькая ры́ба, чем большо́й талака́н.

大きなゴキブリより，小さな魚（のほうがいい）。

そのものずばりを表現したことわざ。生活感がにじみ出ている。それにしても厳寒のシベリアにも「ゴキブリ」がいるとは，なんとも驚きだ（すごい生命力！）ただし，ロシアのゴキブリは日本のものより小さいというから，むしろ「アブラムシ」の方が適切かもしれない。ちなみにゴキブリには俗語で「間抜け」「おまわり，へぼ警官」「麻薬中毒者」の意味もあるそうだ。（муж таракáнは雄のゴキブリにあらず！「ぐうたら亭主」）

◎Лу́чше сини́ца в рука́в чем жура́вль в не́бе.

ルーチシェ　スイニーツァ　ヴ　ルカーフ　チェム　ジュラーヴリ　ヴ　ニェービェ

空の鶴より，手中の四十雀（しじゅうから）。なおжуравль（鶴）は男性名詞。複数の変化はжура́в-ля-/ле́й となる。

ここで少し寄り道して，「鶴」のことに触れよう。鶴жура́вльはクルイロフの『寓話』にも「狼と鶴」の話が入っていて，ロシア人にはごく身近な鳥であるが，ギリシア語géranos，ラテン語grūsの語形と語音を見ると，英語craneドイツ語Kranischとのつながりがはっきりしてきそうだ。「鶴」のほかにも形状の連想からの連想から「てこ」や「つるべ（釣瓶）」の意味もある。

ところが，英語のcrane（鶴，クレーン）の系列は（あるいはオランダ語のkraanやドイツ語のkpanの形で）ロシア語に入ると，кранとなって，「弁，クラン」「クレーン」の意味に限定される。おそらくもとは同じことばがこのように変遷をたどって別の意義を分担するというのも面白い言語現象である。日本では「蛇口」のことをカランというが，これはオランダ語の「kraan」に由来するという。

◎Лу́чше раз уви́деть, чем семь раз услы́шать.

七度聞くより，一度見るほうがいい。百聞は一見に如かず。ちなみに7はロシアのことわざで一番好かれる数である。もちろん，ここでは文字通りの意味ではなく「たくさん」の代わりに用いられている。日本の慣用句でも7が目立つのはご存知の通り。

◎Лу́чше ме́ньше да лу́чше.

少なくとも小さくとも良いほうがいい。量より質。

これは少し変形で，чемがないのが珍しい。このдаは《しかし，だが》の意味で，удар́ение「力点・アクセント」がない。ме́ньше да лу́чше. の部分が主語に当たるわけだから，даの前にはзапята́яをつけないほうがいいだろう。ме́ньшеはма́ленькийの比較級短語尾形ма́лоの比較級である。

英語にも同じ構文，同じ意味のよく知られたことわざがある。

◎Better late than never. これはかなり古くか

らあるらしく，ほぼ同じ形の表現がすでに14世紀にまで遡ることができる。ことによると同一の起源から別れたのかもしれない。言うまでもなく，英語，ドイツ語，フランス語，イタリア語，それに，ポーランド語，ロシア語などは，もともとは同一の言語グループであったことが分かっている。これを印欧語族という。

8　Кто не рабóтает тот не ест. [A／B]

クトー ニ ラボータエット トット ニ イェスト

働かざる者は食うべからず。[文字通りに訳すと《働かぬ者は食わぬ》《働かない者は食べないものだ》という，かなり柔らかな意味合いになる。] たぶん，もとになった表現はЕсль кто не хóчет рабóтать, пусть и не ест. [『新約聖書』テサロニケ後書3:10. 新訳によるロシア語] こちらだと「もし働きたくないのなら，食べてはならない。働きたくない者は食べるべからず」という，かなり強い意味である。

このことわざは今の若い人々には，あるいはあまりなじみがないかもしれない。かつてのソヴィエト連邦の時代には「各人からは能力に応じて，各人には勤労に応じて」とともに「《ソ連社会》のモットー」(江川卓)「“社会主義社会の原則”など」(戸辺又方) と言われて，いかにも華々しく脚光を浴びたものであるが，《ソ連》崩壊後の今日ではもはや昔日の面影はない。社会主義の権威と人気の失墜につれて，このことわざは日本でも近年はめっきり耳にしなくなった。

しかしながら，現在のロシアでも民衆の脳裏にはまだ生々しい印象をとどめているようだ。これをもじったアネクドート（ロシア風小噺）をひとつ紹介しよう。

◎Лóзунг над столóвой обкóма: “Кто у нас не рабóтает тот не есть !”

Лóзунг над столóвой обкóма: “Наша пáртия былá, есть и бýдет есть !”

◎共産党州委員会の食堂の上に掲げられたスローガンに曰く，《ここで働かざる者は食うべからず》

共産党州委員会の食堂の上に掲げられたスローガンに曰く，《われらが党は過去 (была)・現在 (есть)・未来 (будет) ともに (あるのを) 食べる》

二番目のスローガンがестьに [ある] と [食べる] をかけているのはいうまでもない。(さとう好明『実践ロシア語会話』東洋書房から引用。訳文の一部を変更)

さらにここでもう一つ，異色の別ヴァージョンを付け加えておこう。

◎Стáрин сказáл《не рабóта кýщать нет》.

スターリン曰く「働かなきゃ，食ったりするでねー」

これは「終戦後シベリア抑留され」身をもってかたことのロシア語を実践した，ある日本人の持ち帰った表現である。[東郷正延『ロシア語のすすめ』より]

не рабóтаはне рабóтатьの崩れた形，кýщать「召し上がる・食事する」を意味する動詞である。ただ，食べるという意味に用いるのは方言・俗語的表現であるようだ。

このことわざはソ連の憲法にもかつて記載されたことがあるとかで，社会主義のもとで生まれたのかと思いきや，じつは聖書の文言に由来している。もっとも，おそらくは意図的にもとの文章を改めていると思われる。簡約化しているといってもいい。日本人はもとより多くのロシア人もそうとは知らずに，このことばを引いていたのではなかろうか。

「人もし働くことを欲せずば，食すべからず」と (われわれは) 命じたりき [『新約聖書』テサロニケ書3:10. 日本語は《文語訳》による] このロシア語のことわざの最終的な典拠は次の通りである。

◎Есль не хóчет трудúться тот и не ешь. [『新約聖書』テサロニケ後書3:1 . 旧訳によるロシア語]

テサロロニケ書を知らない方も多いと思われ

るので，この前後の脈絡をここでややくわしく紹介しておくのもむだではあるまい。

「兄弟たちよ，主イエスの名によって，あなたたちに命ずる。われわれの伝えた教えを無視して，怠惰な生活をしている信者たちとは一切かかわりを持つな。われわれの示したお手本から，何をどのように学ぶべきかは，言わなくても分かっているはずである。あなたたちのところにいたとき，われわれれは遊び暮らしていたか。人からただでパンをもらって食べていたか。そんなことはない。われわれは，あなたたちのだれにも迷惑をかけまいと，夜も昼も汗水たらして働いたのだ。われわれに，パンをただでもらう権利がないというのではない。ただ，あなたたちの見習うべき手本を自ら示そうとしたのである。われわれは，あなたたちのところにいたとき，こう命じておいたはずだ。「働かざる者は食うべからず」と。ところが，噂によると，あなたたちの中には，自分では何の働きもせず，ただ，人のことに余計な口出しをするだけというのらくら者がいるらしい。そういう者たちに対しては，主イエス・キリストの名によって，こう命じ，かつ訴える。腰を落ちつけて働き，自分が食べるパンは自分の手で稼ぎなさい。」（『新約聖書』柳生直行訳／新教出版社

このことわざを「葡萄畑を耕す者が葡萄を食べる」（マケドニア）ということわざと同じ意味を表わしている（栗原成郎『スラヴのことわざ』）とみなすことはできない。一見似ているようだが，紛れもない違いがある。後者は「まともに働く者が相応の報酬として食するのが当たり前」という農民の立場からなされた物言いであるが，聖書のパウロのことばには，とかく説教者の立場にありがちな強烈な指導者意識がのぞいている。イエス・キリストの復活と終末論を奉じる初期キリスト教教団の組織者として，キリストの名において，ひらの信者の思想を型にはめ，行動を統制し，あるべき正しい生き方へ指導していこうとしている。これは少なくとも日々の糧を得るために労働する者の視点からなされた発言ではない。この聖書のことばがいつしか「働かざる者食うべからず」というソヴィエト支配体制のあるべき労働倫理へと変貌し，労働者・農民の上に君臨するようになったのは決して故のないことではない。かの詩人ヨシフ・ブロツキー（1940～96，1987年度ノーベル文学賞受賞）は「社会的寄食者」として司直に裁かれ「矯正」（強制ではない！）労働五年の刑に処せられたのを想起する必要がある。

ест は есть の三人称単数現在形。тот は関係代名詞 кто の先行詞「（～である）人」。複数形は「те」

◎Кто вчера́ солга́л, тому́ за́втра не пове́рят.

（昨日嘘をついた人を，明日は誰も信じたりはしない。）пове́рят は《普通人称文》で与格補語をとる。

9　Ка́ждый по сво́ему с ума́ схо́дит.［B］

カージドゥイ（フシャーク/フシャーキイ）パスヴォーイム　ス・マー　スホーディト

誰でもそれなりに狂っている（おかしなところがある）。《無くて七癖》

ка́ждый は ка́ждое у́тро［対格］（毎日），ка́ждая пти́ца［主格］ですでにおなじみ。ここでは名詞（各人）［主語］として単独に用いられている。по сво́ему はそれなりの流儀で。По-мо́ему（私の考えでは）は頻出の表現である（これで一語！）。По-мо́ему она́ не права́.（彼女の言うことは正しくないとわたしは思う）

ум は「頭・知恵」→у́мный「賢い」。Сходи́ть с ума́ は「気がふれる」Ты с ума́ сошёл.［完了形］！（気でも狂ったのかい？）これに類することわざを一つだけ挙げておこう。

◎У вся́кой пта́щки свои́ зама́шки.

どんな小鳥［転じて人］にもそれなりの癖がある

ただしこのザマーシカ［まね・癖・ふり］にはあまり悪い意味合いはないようだ。

10　Там хорошо́ где нас нет.

タム　ハラショー　グヂェー　ナス　ニイエート

我々のいないところは良い。《隣の花は赤い》。隣の芝生は青く見える。

где は там を先行詞とする関係副詞の用法。Он живёт там же где ты. あの人は君と同じところに住んでいる。ここの хорошó は述語として用いられており，Здесь хорошó（ここは居心地がいい），Мне хорошó（わたしは快適だ）などという。нас нет は例によって否定生格である。

Fremd Brod schmeckt wohl.

他人のパンはおいしい味がする。

The grass is always greener on the otherside of the fence.

塀の向こう側の芝生はいつでもこちらより青い。

ここで「ロシアのことわざ」というなら，「ロシア固有のもの」を取り扱うべきではないかという声が聞こえてきそうだ。これにしても外国とくにヨーロッパのものと類似の，あるいは借用，伝播によるものではないか。じっさい「二兎を追う者は一兎をも得ず」や「もらい物の馬の歯は調べないもの」のようなことわざをロシア固有のものにあらずとして，「ロシアの諺」として扱わない学者もいる。

しかしながら，それは民族的・国家的枠組みにとらわれた，余りにも狭い考えではあるまいか。さまざまな文化の相互交流やさまざまな影響の歴史や現実を無視しているといわざるを得ない。どだい，ロシア人の間でごく日常的に話されていることわざでも，たとい外来のことわざや成句であっても，多くの人々そうとは意識せずに使っている場合がけっこう多いというのがありのままの現実だと思われる（戸辺又方）。

たとえばОднá лáстоцка не дéлает весны́.「一羽の燕が春（又は夏）を作るわけではない」はイソップやアリストテレスにさかのぼるのであるが，このロシア語の文章がロシア人の間ですっかり定着していることは明らかである。

すでにロシア語として話され，ロシア人の生活に溶け込んで用いられている言い回しは，「ロシア語のことわざ」であるだけではない，りっぱに「ロシアのことわざ」とみなして差し支えないのではないか。

（その１）終わり